

仕合あせの和

第234号

令和3年 9. 1
(毎月1日発行)

二ヶ月にわたる

入院生活

住職 谷川寛俊

まさか入院中に二度目(九月号)の原稿を書くことになろうとは想像だにしませんでした。

例えば6月24日に入院以来今日で50日目、当初の予定では術後10日間ぐらいで退院の予定でしたが、3分の2を切除した膵臓の縫い目から、お腹に入っている細いゴムのチューブを通して、膵液が少量出る為なかなか退院の許可が出なかったのです。

自分としては遅くとも7月中には間違いなく退院出来るものと思っていました。7月末になっても膵液が止まらないので、これはひよっとすると最悪お盆まで帰れないのではないかと毎日焦りの気持ちで募ります。今頃寺族達は、異常気象の猛暑の中、お盆の諸準備等でてんでこ舞いしているのに、自分はこんな状態でベットに横たわっていい良いものか、と毎日いてもたってもいられない

い焦りの気持ちばかり先立ちますが、それでも皆「大丈夫だから安心して治療に専念して下さい」などと優しい思いやりの言葉と力強いメッセージが届くたび、安心感を得ることが出来ました。

ところで、皆様もご存じのように、膵臓は胃の裏側にある長さ15〜20cm、厚みが2cmほどの小さな臓器で、消化液を分泌したり、インスリンなどのホルモンを分泌したりするとても大切な臓器の一つで、その機能が低下すると、消化液の分泌不足により消化不良を起こしたり、糖尿病を発症したりするそうで、特に膵液は内臓をも溶かすくらいの強い液体ですから収まるまであせらず時間をかけて完全に止まるまで退院はできないのだと、あきらめるしかありませんでした。

お陰で皆さんには申し訳なかったけれど、東京オリンピックはゆっくり観戦することが出来ました。又、広島、長崎の原爆慰霊祭、更には8月15日全国戦没者追悼式など初めてゆっくりと心を寄せることが出来ました。オリンピック観戦中にとっても印象に残った言葉がありました。

真成寺ホームページ



玉蓮山 真成寺

編集部 谷川久仁子

TEL・FAX 0765-22-2268

携帯 080-3744-2523

こちらの番号でもお寺につながります。

クーベルタン男爵(オリンピックの父)の言葉を引用されたアナウンサーが、

平和の祭典である五輪で重要なことは、勝つことではなく、参加すること(これはどなたでもご存じの言葉ですが)

『勝者に拍手を送るだけでなく、敗者にも心を寄せて観覧してください』と語り掛けられました。

つまり、敗者に心を寄せることが「平和の道」につながるという主旨がテレビを通じて心に届いたのではないかと思います。更にオリンピックが終わって次は夏の高校野球が始まりました。ここでも又、感動する言葉が紹介されました。それは九回表、この回を守り切れば勝ちというところで、味方の守備のエラーで逆転されたのです。エラーをした選手は勿論のこと、チーム全体意気消沈してベンチに戻って来た時監督は満面の笑顔を作って大声で選手たちに言ったのです。「お前たち、なんて顔をしているんだ！これから伝説を作るぞ！こんな良い見せ場はないぞ！さあみんな伝説を作ってこい！」と言って送り出したのです。

そして結果は見事に逆転して勝ったのです。

スポーツは精神力(心)が多く結果を左右するものです。

入院生活も長くなると、色んな体験になります。その一つ一つ大変勉強になります。何一つ無駄なことがない様にも思えます。

全てこれらは私に課せられた宿命かも知れません。

この原稿が仕上がる頃には、無事退院していることと思います。

檀信徒の皆様方には物心両面に亘り、ご心配おかけ致しました事を紙面を借りて厚く御礼申し上げます。

(八月十四日お盆中)

